

Sasakawa Health Foundation Annual Report 2025

笹川保健財団
年次報告書2025



Better Health & Dignity for All

笹川保健財団
SASAKAWA
Health Foundation

新たな変革への一步を 踏み出せた2025年



公益財団法人笹川保健財団 会長

喜多 悦子

3 会長挨拶
新たな変革への一步を踏み出せた2025年

4 財団について
活動理念/使命/行動基準

5 活動
ハンセン病対策/地域保健の推進

6 ハンセン病対策 活動紹介

8 国立ハンセン病資料館等の運営と啓発広報一式 活動報告

10 地域保健の推進 活動紹介

12 その他 活動紹介

14 会計報告/財団概要

2025年、世界では、各地で紛争や災害が続き、人々の生命と暮らしの基盤が改めて問われました。わが国では、世界最速の超高齢社会よりも急速な少子化への懸念が深まったように思います。それが故に、世界と日本各地でのより良い保健・医療・福祉のサービスを如何に持続し、発展させられるかが課題となっていると実感し、“Better Health and Dignity for All すべての人々により良い健康と尊厳を”を目指す活動をいっそう強化拡張してまいりました。

国際的にはハンセン病に対する偏見差別の解消を目指し、新年度間もない6月に日本財団名誉会長となられた笹川陽平WHOハンセン病制圧大使と連携した多様な活動を、まだハンセン病が発生し続けている国々を中心に地道に繰り広げて参りました。2025年度はネパール、スリランカ、ブラジルといったハンセン病蔓延国でハンセン病全国会議を、インドネシアで世界ハンセン病当事者団体会議/グローバル・フォーラムを開催し、各国でハンセン病対策の必要性を訴えました。

国内では、「地域を支える看護師の力」の重要性をこれまで以上に実感いたしました。幸い2024年1月の能登半島地震、同地での同年9月の豪雨災害以降、大きな自然災害や対応困難な感染症は発生しませんでした。日々進行する超高齢化と少子化、そして過疎化対策のためにオール日本の対応を考えねばならない年でした。単純な対策では対応しきれぬ、複雑化しつつある課題に今後どのように向きあうか、住み慣れた地域での人々の健康と尊厳を守る取り組みの成果、真価が問われつつあることを改めて認識しました。

「日本財団在宅看護センター」起業家育成事業は、8か月研修を再開し、研修の修了者は120名を超え、事業所数も約150、事業数は200を超えています。しかし、未開業が未だ16府県、その多くが深刻な高齢化・過疎化に向き合っており、ますます看護力の重要性が増していると認識しています。起業家たちのネットワーク活動を土台に、研究助成や看護を中心とする保健系学生・院生のフィールド研修、さらにダイバーシティと国際性を経験した社会の指導者を目指す看護師のためのアメリカ・カナダでの修士・博士号取得を目的としたSasakawa看護フェロー事業も着々と進行しています。

世界は分断と不安定化が続きました。私ども笹川保健財団では、「Leave no one behind 誰一人取り残さない」の考えを「世界は一家、人類はみな兄弟姉妹」との言葉で100年も前に唱えた財団創設者笹川良一翁の目指した理念を改めて問うた一年として、戦争、感染症、気候変動、人口構造変化といった複合的課題に対し、プライマリー・ヘルス・ケアを土台とする活動を真摯に繰り広げました。

この複雑な時代を共有する皆さまのご支援ご指導を頂き、WHOほかの国際活動とも連携しつつ、引き続き、各自が暮らす身近な地域をしっかりと支えられる人材育成を含む活動を続けます。

会長ブログ ネコ目 >>>

医師ならではの視点から論説、エッセイ、活動の様子・紹介を随時更新しています。

https://www.shf.or.jp/blog_chair



VISION
活動理念

Better Health & Dignity for All

すべての人々に、より良き健康と尊厳を

すべての人々が、いつでも、どこでも、どんな状況下にあっても、
身体的にも、精神的にも、社会的にも、さらにスピリチュアルにも、より良い状態と、
人としての尊厳を維持できる社会を目指します。

MISSION
使 命

人々がどのような状況にあっても、
健康で尊厳ある生活を送ることができるよう、
私たちは支援します。

VALUES
行動基準

- ・グローバルな視点を持ち、活動理念を追求し、新しいことに挑戦し続けること。
- ・共生社会の実現に向けて、科学的根拠に基づいた手法を用いて問題解決に当たること。
- ・世界の一員として、互いに顔が見える信頼関係を築き、
志を同じくする仲間の力を結集し、支援を必要とする人々が自ら立ち上がる力を支えること。

ハンセン病対策

ハンセン病問題のない世界、ハンセン病を経験したことで苦しむ人々がなくなる世界の
実現を目指し、3つの柱の下で活動を実施しています。






-  病気による負荷をなくす
-  偏見・差別をなくす
-  歴史を保存する

**「看護師が社会を変える！」
地域保健の推進**

「医療」だけでなく「生活」支援にも関与できる看護師が、
地域で力を発揮できるようになるための人材育成や活動支援を行っています。



-  在宅看護で地域の健康を護る
-  地域保健力を強化する
-  看護リーダーを養成する

ハンセン病回復者に対する偏見と差別の撤廃を目指し、「グローバル・アピール2026」を開催

2026年1月29日、ベルギー・ブリュッセルにおいて「グローバル・アピール2026」を開催しました。教育インターナショナルとの共催のもと、教育が持つ力を通じてハンセン病回復者への偏見や差別をなくし、包摂的な社会の実現を目指すメッセージを発信しました。式典およびセミナーには教育やハンセン病問題に取り組む関係者を中心に約80名が参加し、「誰一人取り残さない」という理念のもと、連帯と協力の重要性を共有しました。また、式典の午前中にはハンセン病回復者代表らがベルギー王妃に謁見しました。



ハンセン病回復者に対する偏見と差別の撤廃を目指すグローバル・アピール2026 (2026年1月、ベルギー)

BELGIUM

ハンセン病の歴史ウェブサイトをリニューアル

ハンセン病の歴史を伝えるウェブサイトを10年ぶりに全面リニューアルしました。国別・時代別の資料検索に加え、アート作品や関係者の証言、関連資料なども、より体系的に閲覧・検索できるようになりました。今後は、世界各地の資料やコンテンツをさらに充実させ、ハンセン病に関する歴史保存の「記憶」と「記録」をつなぐ国際的なオンラインネットワークの構築を目指します。



新しい歴史サイトトップページ

NEPAL

SRILANKA

INDONESIA

BRAZIL

活動成果

WHOを通じて**30**か国のハンセン病制圧活動を支援
 ハンセン病当事者団体会議に**25**か国から**120**名以上のハンセン病当事者が参加
180の国・地域で教育者を代表する**377**の加盟組織からなる
 教育インターナショナルと連携し、偏見・差別の撤廃を訴えイベントを開催

ハンセン病当事者の若手リーダーが集った国際ワークショップ

2026年2月、インドネシア・マカッサルで、ハンセン病当事者の若手リーダーを育成する「ヤングスカラープログラム」の初の国際ワークショップが開催されました。インド、インドネシア、コロンビア、バングラデシュのスカラヤーメンター約40名が参加し、活動報告や現地視察を通じて交流を深め、偏見や差別のない社会づくりへの学びと連帯を育みました。



笹川ハンセン病イニシアチブヤングスカラープログラム国際ワークショップ(2026年2月、インドネシア)

第3回世界ハンセン病当事者団体会議を開催

2025年7月、インドネシア・バリにおいて、第3回世界ハンセン病当事者団体会議を開催し、25か国から120名以上のハンセン病当事者が参加しました。会議での議論の成果は提言として取りまとめられ、第22回国際ハンセン病学会(ILC)開会式において発表されました。さらに、提言の実施状況を継続的にモニタリングするため、当事者代表による諮問委員会を設立しました。



第3回世界ハンセン病当事者団体会議(2025年7月、インドネシア)

各国政府と連携し、ハンセン病制圧に向けた全国会議を支援

ハンセン病問題の解決に向け、各国政府や保健省、関係機関への働きかけを行い、重点国における全国会議の開催を支援しました。2025年5月にはネパール・カトマンズで全国会議が開催され、首相や保健大臣参加のもと、ハンセン病問題の解決に向けた取り組み強化が表明されました。11月にはスリランカ・コロンボで、大統領出席のもと2035年までにWHOが掲げる感染停止の実現に向けたロードマップが示されました。さらに2026年3月にはブラジル・リオデジャネイロで、保健大臣や人権・市民権大臣らが参加する全国会議を支援し、ハンセン病制圧に向けた国際的な連携強化を後押ししました。



スリランカ全国会議(2025年11月、スリランカ)

厚生労働省受託事業

「国立ハンセン病資料館等の運営と啓発広報一式」活動報告

国立ハンセン病資料館と重監房資料館の管理運営、シンポジウム等の開催、啓発資料の作成に加え、本年度からはハンセン病問題に関する普及啓発事業(療養所入所者自治会等への助成)とハンセン病対策促進事業(地方公共団体への助成)も新たに受託し、ハンセン病問題の正しい理解の普及啓発に努めました。

国立ハンセン病資料館

〒189-0002 東京都東村山市青葉町4-1-13
電話：042-396-2909
開館時間：午前9時30分～午後4時30分
休館日：毎週月曜日および祝日の翌日、年末年始
入館料：無料
年間来館者数：26,244人(前年度比36人減)



<https://www.nhdm.jp>

企画展等の開催

- ・企画展「お父さん お母さんへ ハンセン病療養所で書かれたある少年の手紙」
 - ・ギャラリー展
 - 「桜を植えた人びと 多磨全生園70年の桜並木」
 - 「絵で見てわかるハンセン病問題パネル展」
 - 「戦後80年 戦争とハンセン病」
 - ・特別展「ハンセン病問題と家族」
- ※上記に関連する行事を21回実施。参加者合計873人。

館内での啓発事業および図書室

- (団体見学対応)
10人以上の団体を対象に見学事前ガイダンス、オンライン展示解説を実施。
- (常設展示解説)
学芸員による展示室2の解説を週末・祝日に合計27回実施。参加者合計396人。
- (特別公開 重監房の内側)
重監房再現展示の内部に入り隔離の厳しさを体験。2回開催、参加者合計60名。
- (図書室)
入室者5,257人、レファレンス687件、通常貸出し1,828件、複写申請1,256件。

全生園の史跡ガイドツアー

多磨全生園入所者自治会と多磨全生園と連携し、ガイドツアーの解説は多磨全生園の学芸員が担当。教員向けの回と一般向けの回を分けて実施し、教員向けの回は国立科学博物館が統括する「教員のための博物館の日2025」のイベントとして実施。

- ① 5月 6日 教員向け15人 一般向け21人
- ② 11月23日 教員向け15人 一般向け16人

出張講座・館外展示

- (出張講座)
小中学校・高等学校・大学、自治体、教育委員会等からの依頼に応じ、講師を派遣してハンセン病問題についての講演を実施。実施回数140回(対面105回、オンライン25回、録画10回)、聴講者数合計22,192人。
- (館外展示)
「その壁の向こう側 -写真が語るハンセン病問題の真実-」(自立式写真パネル8点一式)の展示を横浜市役所など7会場で実施。



「戦後80年 戦争とハンセン病」ポスター



常設展示解説の様子



全生園の史跡ガイドツアー



出張講座の様子

活動成果

国立ハンセン病資料館に**26,244**人、重監房資料館に**4,739**人が来館
小中学校・高等学校・大学、自治体等にて**140**回の出張講座を実施、
延べ**22,192**人が聴講

重監房資料館

〒377-1711 群馬県吾妻郡草津町草津白根464-1533
電話：0279-88-1550
開館時間：午前9時30分～午後4時30分(通常期)
午前10時～午後4時(冬期)
休館日：毎週月曜日および祝日の翌日、年末年始
入館料：無料
年間来館者数：4,739人(前年度比135人増)



<https://www.nhdm.jp/sjpm>

重監房資料館とは

「重監房」は、群馬県草津町にある国立療養所栗生楽泉園の敷地内にかつて存在した、ハンセン病患者を対象とした懲罰用の建物で、正式名称を「特別病室」といいます。しかし、「病室」とは名ばかりで、実際には患者への治療は行われず、「患者を重罰に処すための監房」として使用されていました。重監房資料館では、「特別病室(重監房)」とハンセン病問題に関する資料の収集・保存と調査・研究の成果を発表することにより、広くハンセン病問題への理解を促し、ハンセン病をめぐる差別と偏見の解消を目指しています。(参照 重監房資料館公式ウェブサイト)重監房の実寸大再現展示や出土遺物展示等からなる展示室のほか、年間を通じて様々なイベントを企画運営しています。

ウォーキング・ツアーの開催

ハンセン病問題の歴史と密接な関わりを持つ群馬県草津町内に点在する、ハンセン病ゆかりの史跡や施設等をボランティア・ガイドの案内で徒歩で巡るウォーキング・ツアー「初めてのハンセン病史 -もうひとつの草津温泉-」を4回開催。参加者合計27人。

シンポジウム等の開催

- ・第25回ハンセン病問題に関するシンポジウム
(宮城県仙台市。現地参加者113人、オンライン175人)
- ・第46回ハンセン病医学夏期大学講座
(当館ほか。現地参加者46人、オンライン206人)
- ・第37回ハンセン病コ・メディカル学術集会(青森市、参加者207人)

ハンセン病対策促進事業

全国の地方公共団体(都道府県および市区町村)を対象に、ハンセン病問題の解決に資する事業を助成。(合計10事業、総額13,730千円)

関連活動

「国立療養所長島愛生園宿泊研修」の開催

8月26日から28日の3日間、長島愛生園の宿泊研修施設「むつみ交流館」に宿泊し、愛生園入所者の皆さまの講話や園内フィールドワーク、ワークショップによりハンセン病問題を契機としたインクルーシブな社会の在り方をともに考えた。全国の学部・専攻を問わない大学生・大学院生14名が参加。



重監房(特別病室)実寸大再現展示



ウォーキング・ツアーの様子



第25回ハンセン病問題に関するシンポジウム



宿泊研修ワークショップ

看護師が社会を変える！ 地域保健の推進

日本財団在宅看護センター 起業家育成研修再開

コロナ禍をはさみ休止していた、8か月間の看護師起業家育成研修を再開。10期生となる8名の受講者が、共に学びながら開業計画を作成し、研修修了後の在宅看護センター（訪問看護ステーション）開設にむけ動き出しました。10期生の修了により、2014年から始まった本研修の修了者は124名となりました。



フィジカルアセスメント研修



8か月を共に過ごす研修受講者たち。互いの存在が刺激に



県外研修では大阪万博も訪問、ヘルスケアパビリオンを視察

2025年度
開業都府県

10か所目の看多機ほか 新事業所ぞくぞく開設

財団は、起業家育成研修修了者の事業所開設を支援しています。2025年度は、研修修了者（9期生、10期生）が続々と在宅看護センターを立ち上げたほか、2026年3月に本ネットワーク9か所目、4月には10か所目となる看護小規模多機能型居宅介護事業所（看多機）がそれぞれ宮崎県と山口県で、財団支援を受けて開設されました。



開業した修了者と仮設住宅の利用者さん（石川県輪島市）



看多機エリアの開所式（山口県下関市）

医療的ケア児と家族が直面する課題を問題提起

「ボートレース場を地域に開かれた場所にしたい」と丸亀ボートレース場に併設された遊び場「Mooviまるがめ」に、看護師が見守るなか、医療的ケア児とその家族を招待しました。また、日本財団主催のアジアフィランソロピー会議では、在宅看護センターネットワークで医療的ケア児支援を行う管理者らを招いたトークセッションも実施。課題や在宅看護の可能性について議論しました。



Mooviまるがめで遊ぶ医療的ケア児と家族

活動成果

全国**31**都道府県で約**200**の事業展開

日本財団在宅看護センターネットワーク

総従業員数約**1,600**人、総利用者数約**8,700**人、年間訪問件数約**92**万件

学び続ける機会を提供

日本財団在宅看護センターネットワークでは、管理者だけでなく、その事業所で働くスタッフが、現場で働きながら学びつづけ、専門性と視野を広げる機会を提供しています。2025年度は、恒例の年2回の海外研修のほか、オンラインで履修する新設のZEN大学への就学支援を開始しました。



デンマークの高齢者施設で説明を受ける



春季北欧研修報告書
（フィンランド・デンマーク）



秋季欧州研修報告書
（スイス・フランス）

【在宅医療と看護】公開講座・書籍出版

在宅医療の現場を知る医師・看護師・福祉の専門家が、在宅看護の実際と、これからの地域包括ケアのあり方をわかりやすく解説するオンライン公開講座シリーズ【在宅医療と看護】を開催。医療従事者を中心に、のべ1,300人超が参加しました。築地書館から刊行した書籍では、在宅看護師14名の実例を紹介しました。



「在宅看護師：地域を支える看護の力」築地書館 公開講座



地域保健を支える多様な研究を採択

在宅医療・看護、地域包括ケア、がん・高齢者支援、医療アクセス格差、当事者支援など、地域社会に根差した研究課題を採択、助成しました。看護職を中心に、多職種連携やICT・GIS等を活用した実践的研究が数多く採択され、現場課題の解決と地域のWell-being向上に資する研究が幅広く展開されました。



前年度の研究成果を報告し合い議論する研究助成報告会

FY2025 FEATURED PROJECTS AND INITIATIVES

その他 活動紹介

Sasakawa看護フェロー 海外留学奨学金

コロビア大学メルマン公衆衛生大学院
公衆衛生学修士 疫学専攻
松丸 莉茄

デューク大学
医学部臨床情報学修士
星谷 真子

ワシントン大学
看護実践学博士 渡邊 美幸

エモリー大学ロリス公衆衛生大学院修士
行動・社会・健康・教育科学専攻 岡田 香織
国際保健専攻 岩水 結子

5名の看護師が留学開始、 6名が米国名門大学院を修了

看護師の海外大学院留学奨学金Sasakawa看護フェロー事業では、2025年、新たに5名のフェローを留学に送り出しました。また、6名のフェローが学位を取得し、それぞれ政府、研究機関、国連機関等に就職しました。

Sasakawa看護フェロー

ささかわ未来塾 九州スタディツアー

2025年度は、日本の近代医学発祥の地長崎で「健康と人間の安全保障」を考える5日間と題し、医療・保健系学生・大学院生を対象とした夏休みスタディツアーを開催しました。全国から20名の学生たちが長崎県五島市および長崎市に集まり、「地域と世界をつなぐ保健・医療・福祉の未来」をテーマに、多彩な講義とフィールドワークに参加しました。

五島市 長崎市

「ささへるジャーナル」・「財団公式Instagram」活動報告を更新中

財団のオウンドメディアである「ささへるジャーナル」は、事業活動の様子やカウンターパート取材し、分かりやすく活動を紹介する読み物コンテンツです。2025年度は国立ハンセン病資料館で開催したギャラリー展や、インドネシアで実施したハンセン病当事者コミュニティ若手リーダー育成プログラムワークショップの様子等、計22記事を公開しました。また、2025年10月には財団公式Instagramを開設し、画像や動画で活動紹介を投稿しています。

国立ハンセン病資料館企画展の取材から
笹川ハンセン病インドネシア若手リーダー育成プログラム国際ワークショップの様子

WHO笹川健康賞

受賞者のMerete Nordentoft博士(左から2番目)と笹川陽平日本財団会長(右、当時)、テドロス・アダム・ゲブレイエスWHO事務局長(右から2番目)、第78回世界保健総会議長テオドロ・J・ヘルボサ博士(左)(2025年5月23日 スイス・ジュネーブ)

2025年度に第41回目を迎えたWHO笹川健康賞には、デンマークのMerete Nordentoft博士が選ばれました。(デンマークにおける全国的な若年層の自殺予防対策への功績に対して。)WHO笹川健康賞では設立以来初めてとなるメンタルヘルスの分野での受賞で、今後若年層の自殺予防対策がプライマリー・ヘルス・ケアの貢献につながる事が期待されます。

マダガスカル口唇口蓋裂医療協力

2025年9月にマダガスカルで口唇口蓋裂医療協力を実施しました。(一社)日本マダガスカル口唇口蓋裂医療協会(代表 土佐泰祥)が実施団体となり、計8例の口唇鼻形成術・口蓋形成術・口唇裂二次修正術を実施、現地医療従事者と術後フォローアップについて共有する等、現地の医療技術の向上、および患者のQOL向上に貢献することができました。

術後の診察、自分の顔が映った鏡を嬉しそうにのぞき込む患児

正味財産増減計算書内訳表 2025年4月1日から2026年3月31日まで

I 一般正味財産増減の部		(単位：円)					
科	目	公益目的事業会計	法人会計	合計			
1. 経常増減の部	(1)経常収益	基本財産運用益	0	9,418,500	9,418,500		
		特定資産運用益	45,924,670	25,488,089	71,412,759		
		事業収益	732,923,000	0	732,923,000		
		受取助成金	1,379,134,332	86,580,000	1,465,714,332		
		受取支援金	20,717,771	0	20,717,771		
		受取寄附金	14,161,002	0	14,161,002		
		雑収益	7,227,596	2,191,016	9,418,612		
		経常収益計	2,200,088,371	123,677,605	2,323,765,976		
		(2)経常費用	助成金事業費	1,379,052,511	0	1,379,052,511	
			自主事業費	118,996,449	0	118,996,449	
	受託事業費		732,794,252	0	732,794,252		
	事業費計		2,230,843,212	0	2,230,843,212		
	助成金管理費		0	68,752,695	68,752,695		
	自主管理費		0	27,177,810	27,177,810		
	管理費計		0	95,930,505	95,930,505		
	経常費用計		2,230,843,212	95,930,505	2,326,773,717		
	評価損益等調整前当期経常増減額		△ 30,754,841	27,747,100	△ 3,007,741		
	特定資産評価損益等		35,165,023	△ 13,161,260	22,003,763		
	評価損益等計	35,165,023	△ 13,161,260	22,003,763			
	当期経常増減額	4,410,182	14,585,840	18,996,022			
2. 経常外増減の部	(1)経常外収益	雑収入	900,000	225,000	1,125,000		
		経常外収益計	900,000	225,000	1,125,000		
	(2)経常外費用	経常外費用計	0	0	0		
		当期経常外増減額	900,000	225,000	1,125,000		
		当期一般正味財産増減額	5,310,182	14,810,840	20,121,022		
		一般正味財産期首残高	877,943,696	3,093,234,789	3,971,178,485		
一般正味財産期末残高	883,253,878	3,108,045,629	3,991,299,507				

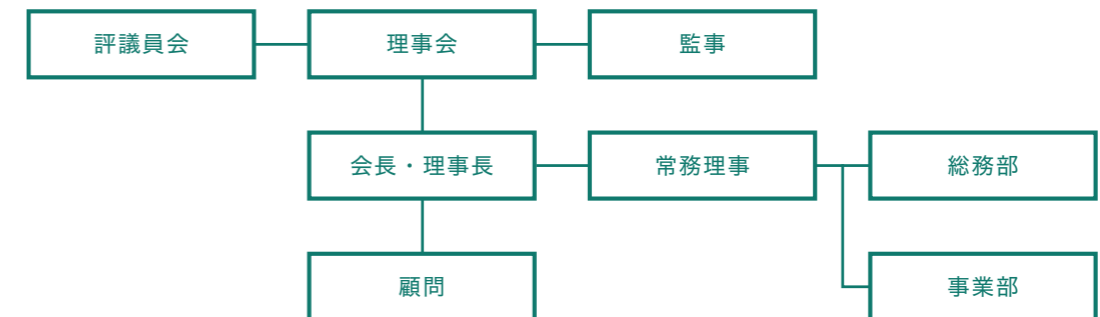
II 指定正味財産増減の部					
	受取補助金等	330,000,000	0	330,000,000	
	受取寄附金	11,372,121	0	11,372,121	
	特定資産評価損益等	34,657,645	0	34,657,645	
	一般正味財産への振替額	△ 170,026,237	0	△ 170,026,237	
	当期指定正味財産増減額	206,003,529	0	206,003,529	
	指定正味財産期首残高	3,211,870,106	113,600,000	3,325,470,106	
	指定正味財産期末残高	3,417,873,635	113,600,000	3,531,473,635	

III 正味財産期末残高	4,301,127,513	3,221,645,629	7,522,773,142	
--------------	---------------	---------------	---------------	--

財団概要

名称	公益財団法人笹川保健財団
英文名称	Sasakawa Health Foundation
代表理事	会長 喜多悦子
所在地	東京都港区赤坂1丁目2番2号 日本財団ビル5階
電話 / F A X	03-6229-5377 / 03-6229-5388
公式サイト	https://www.shf.or.jp
設立年月日	1974年(昭和49年)5月4日
所管官庁に関する事項	内閣府
定款に定める目的	この法人は、「世界は一家、人類はみな兄弟姉妹」の理念に基づき、世界の安寧と人類の福祉を希求し、個々人の健康寿命の延長と、身体的病苦のみならず、社会的、精神的、スピリチュアルな健康問題の解消を目指し、世界で最も苦難を強いられてきたハンセン病患者をはじめとして、すべての人々の保健の向上に貢献することを目的とする。

組織図



役員・評議員・顧問名簿 2026年6月1日現在

会長	喜多悦子	日本赤十字九州国際看護大学 名誉学長
常務理事	橋本朋幸	
常勤理事	南里隆宏	
理事	一盛和世	非常勤理事 長崎大学 客員教授
理事	遠藤弘良	非常勤理事 聖路加国際大学 名誉教授
理事	島田陽子	非常勤理事 独立行政法人地域医療機能推進機構 理事
監事	金子明	一般財団法人日本財団母乳バンク 総務部ディレクター
監事	馬目利昭	馬目公認会計士事務所 代表
評議員	坂元茂樹	公益財団法人人権教育啓発推進センター 理事長
評議員	高木智子	朝日新聞 記者
評議員	長尾榮治	国立療養所大島青松園 名誉園長
評議員	福井次矢	日本薬科大学 学長
評議員	福井トシ子	国際医療福祉大学大学院 教授・副大学院長
評議員	三好知明	公益財団法人伊豆保健医療センター 医師
評議員	吉倉和宏	公益財団法人日本財団 常務理事
顧問	石垣靖子	北海道医療大学 名誉教授
顧問	佐藤美穂子	公益財団法人日本訪問看護財団 理事
顧問	松本源二	
顧問	山下俊一	福島県立医科大学 理事長特別補佐・副学長

公益財団法人 笹川保健財団

〒107-0052 東京都港区赤坂1丁目2番2号 日本財団ビル5階
TEL: 03-6229-5377 FAX: 03-6229-5388

<https://www.shf.or.jp/>




<https://www.facebook.com/SasakawaHealth/>



https://www.instagram.com/sasakawa_health_foundation/



<https://www.youtube.com/@SasakawaHealthFoundation>

 メールマガジンお申し込みはこちら



メールマガジンにご登録いただくと、
当財団が実施する事業に関する
新着情報をお届けします。

Supported by  日本財団 THE NIPPON FOUNDATION